

抽象的人間的労働と価値の質的規定性について（上）

佐々木 隆 治

はじめに

抽象的人間的労働は、『資本論』第一部における最も基本的な概念でありながら、さまざまな誤解にさらされ、多くの場合、未だに正確に理解されていない。

これまで、抽象的人間的労働の解釈をめぐる最大の対立点は、抽象的人間的労働が歴史貫通的で素材的な概念なのか、それとも特殊歴史的で「純粹に社会的」な概念なのか、というものであった。古くはイサーク・ルービンや廣松渉、近年ではモイシュ・ポストンやジョン・ホロウェイ、ミハエル・ハインリッヒなどの論者が、前者の解釈を「実体主義的」だとして退け、後者の「関係主義的」な解釈を主張してきた。論者によって様々な違いがあるとはいえ、彼らにおおむね共通するのは、もし抽象的人間的労働を歴史貫通的で素材的なものとして解釈するのなら、抽象的人間的労働が形成する価値の歴史的特殊性を示すことができず、したがって価値を形成する労働の特殊性を示すことができないのではないか、という問題意識である。つまり、彼らは、抽象的人間的労働を社会的構成物として把握することによって、はじめて資本主義社会の特殊性を把握できると考えたのである。

なるほど、こうした「関係主義的」解釈は、階級的所有関係と搾取にだけ注目し、価値生産の特殊性に目を向けようとしないう、素朴な「実体主義的」解釈にたいする批判としては有意味であったと言えよう。とはいえ、「関係主義的」解釈もまた一面性を免れていない。というのも、それらの解釈は、社会的形態規定の特殊性に固執したために、社会的なものと素材的なものを二項対立的に二分する思考に陥り、両者の絡み合いを把握できなくなってしまったからである。その結果、「実体主義的」解釈と同様に、「関係主義的」解釈もまた、マルクスの経済学批判にとって決定的な意義をもつ、物象的形態規定による素材変換 *Stoffwechsel* の編成と攪乱を把握するための視座を失ったのである。

そこで、本稿では、抽象的人間的労働をマルクスのテキストに即して厳密に解釈し、その意義を明らかにしたい。また、そのことをつうじて、価値の質的規定性についても明らかにすることができるであろう。

1. 抽象的人間的労働とはなにか

まず、マルクスが『資本論』で用いている抽象的人間的労働という概念について確認しておこう。

「労働生産物の有用的性格とともに、労働生産物に表されている労働の有用的性格も消え失せ、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的形態も消え失せ、これらの労働は、もはや互いに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間的労働、すなわち抽象的人間的労働に還元されている」(MEGA II/6, S. 72)

「すべての労働は、一面では、生理学的な意味での人間的労働力の支出であり、同じ人間的労働あるいは抽象的人間的労働というこの属性においてそれは商品価値を形成する」(MEGA II/6, S. 79)

「抽象的人間的労働——抽象的労働というのは、上着に含まれている労働の特定の、有用な、具体的な性格を捨象しているからであり、人間的労働というのは、労働がここでは人間的労働力一般の支出でしかないからである」(MEGA II/5, S. 630)

「裁縫労働の形態においても、織布労働の形態においても、人間的労働力が支出されている。したがって、どちらも人間的労働という一般的属性をもっており、またそれゆえ、特定の場合、たとえば価値生産の場合には、どちらもただこの観点のもとでのみ考察されうる。こうしたことはすべて神秘的なことではない。ところが、商品の価値表現においては事態がねじ曲げられる。たとえば、織布労働が、織布労働としてのその具体的形態においてではなく、人間的労働としてのその一般的属性においてリンネル価値を形成するということを表現するために、織布労働にたいして裁縫労働が、すなわちリンネルの等価物を生産する具体的労働が、抽象的人間的労働の手でつかめる実現形態として対置されるのである」(MEGA II /6, S. 90)

これらの引用文から、次のことを言うことが出来るだろう。

第一に、抽象的人間的労働は、労働から労働がもつ特定の具体的形態、具体的性格を捨象したものであり、もはや人間的労働力一般の支出としての意味しかもっていない労働のことである。したがって、どんな種類の労働も、抽象的人間的労働としては、すなわちそれらの具体的形態を捨象された労働としては、互いに区別のない、同じ労働だということになる。

もちろん、どんな労働も必ず具体的形態をもっており、抽象的人間的労働そのものが目に見えるように存在しているわけではない。つまり、労働の「現物形態 Naturalform」¹⁾である具体的有用労働とは異なり、抽象的人間的労働は手で掴むことができるような感性的定在をもっていない²⁾。だが、他方、どんな労働も「一面では、生理学的な意味での人間的労働力の支出」である。じっさい、どんな場合でも、この「生理学的な意味での人間的労働力の支出」なしに労働することは不可能である。このような意味で、あらゆる労働は、互いに区別のない同じ人間的労働、すなわち抽象的人間的労働としての属性をもっていると言うことができるのである。

第二に、マルクスがたびたび省略のために用いる人間的労働や抽象的労働という表現は、抽象的人間的労働と同じ内容を意味する概念であり、それ以外のものではない。それを明示的に示すのが引用文である。抽象的労働という表現が労働から具体的有用形態を捨象したものだという側面を強調しており、人間的労働という表現が人間的労働力一般の支出であるという側面を強調しているという違いがあるとはいえ、論理的に考えて両者が抽象的人間的労働と同じ意味内容をもっていることは明らかであろう³⁾。じっさい、引用文においても、「織布労働が、織布労働としてのその具体的形態においてではなく、人間的労働としてのその一般的属性においてリンネル価値を形成するということを表現する」と述べられており、人間的労働が抽象的人間的労働とまったく同じ意味で使われている。

第三に、抽象的人間的労働は特殊歴史的な概念ではない。抽象的人間的労働という概念は、それじたいとしてみれば、具体的形態を捨象された、生理学的な意味での人間的労働力の支出

-
- 1) マルクスは Naturalform という言葉を、多くの場合、物や労働の感性的定在形態を意味するものとして使用している。Naturalform がこの意味で使われる場合、物については「現物形態」、労働については「自然形態」というように訳し分けられることが多いが、どちらの場合も、目で見て、手で掴むことができるような感性的定在形態という同じ意味で用いられているので、若干不自然ではあるが、労働について使われる場合にも「現物形態」と訳した。
 - 2) 「あらゆる労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間的労働力の支出であり、具体的有用労働というこの属性において労働は使用価値を形成する」(MEGA II/6, S. 79 80) と言われるように、具体的有用労働は具体的で有用な形態での人間的労働力の支出に他ならず、労働の現物形態そのものである。これにたいし、抽象的人間的労働は、それじたいとしてみれば、素材的なものであるが、それが具体的形態を捨象された労働であるかぎり、労働の現物形態ではない。
 - 3) とここで、マルクスは引用文 や の場合には抽象的人間的労働を *abstrakt menschliche Arbeit* と書いている。そこで、この *abstrakt* を副詞として理解した上で、「抽象的人間的労働とは抽象的人間による労働のことだ」と解釈する議論も一部にはあるが、これが誤りであることは明らかであろう。 の引用文においては *abstrakte menschliche Arbeit* と書かれているが、文脈上、 や における価値の実体をなす抽象的人間的労働と同概念であることは明らかであり、ここから や における *abstrakt* は副詞ではなく、語尾が省略された形容詞だということがわかる。また、マルクスはフランス語版『資本論』で抽象的人間的労働という場合に、「この語の抽象的な意味での人間的労働 *travail humain, dans le sens abstrait du mot*」という言い方をしており、このことから や の *abstrakt* が副詞ではなく、形容詞であることが理解できる。なお、以上のことは大谷禎之介氏からご教示いただいた。

としての労働という意味しかもたない。どんな労働も人間的労働力の支出なしにおこなうことはできないのだから、この定義に従うのなら、歴史上に存在した、あるいは現存している、あらゆる労働は、抽象的人間的労働としての属性をもっていると考えるほかない。

さらに、マルクスが抽象的人間的労働と同じ意味で用いている人間的労働という概念の使用法に着目すれば、このことはいっそう明確になる。後にみる引用文からもわかるように、マルクスは人間的労働という概念を、資本主義社会だけでなく、それ以外の社会状態の労働にたいしても使用している。先にみた引用文 においても、人間的労働が価値生産に限定される概念ではないことが示唆されている。なぜなら、「裁縫労働の形態においても、織布労働の形態においても、人間的労働力が支出されている。したがって、どちらも人間的労働という一般的属性をもっており、またそれゆえ、特定の場合、たとえば価値生産の場合には、どちらもただこの観点のもとでのみ考察されうる」と言われるように、価値生産という「特定の場合」において、労働を人間的労働という「観点のもとでのみ考察」するためには、そもそもあらゆる労働が、「特定の場合」にかぎらず、人間的労働という一般的属性をもっているということを前提しなければならないからである。

抽象的人間的労働が特殊歴史的な概念ではなく、歴史貫通的概念であることは、以上からすでに明らかであるように思われる。とはいえ、この点はとくに異論が多いところである。なぜなのだろうか。

抽象的人間的労働は労働生産物に対象化され、凝固すると、価値になる。この意味で抽象的人間的労働は価値の実体をなす。この命題についての異論はほとんど存在しないと良いだろう。しかし、多くの論者はこの命題から次のような推論をしてしまう。「抽象的人間的労働の対象化が価値にほかならず、他方、価値は純粋に社会的なものであり、したがって歴史的なものなのだから、抽象的人間的労働もまた純粋に社会的なものであり、したがって歴史的なものであるに違いない」⁴⁾と。つまり、多くの論者は、あれほど明確な定義がテキストに書かれているにもかかわらず、価値との関連を考察する際に、この定義とは矛盾した解釈をしてしまうのである。

このような推論をしてしまう理由は、主として、以下の六点を理解していないことに求めることができよう。

第一に、抽象的人間的労働は労働が私的労働としておこなわれる場合にだけ、価値を形成することができる。

第二に、抽象的人間的労働は人間の労働にかならず付随する人間的労働力一般の支出という側面を表す概念であり、それじたいとしては素材的なものであるが、他方、その対象化である価値は人間たちの関わり *Verhalten* の産物であり、純粋に社会的なものだということである。

4) 典型例は、イサーク・ルービン『価値論概説』竹永進訳、法政大学出版局、1993年や廣松渉『資本論の哲学』勁草書房、1987年の解釈である。

第三に、それじたいとしては素材的なものでしかない抽象的人間的労働としての労働の属性は、人間たちが社会的分業を営んでいる場合には、ある社会的性格をもつ。

第四に、抽象的人間的労働が歴史的貫通的にある社会的性格をもつという事柄と、商品生産関係においては私的労働が抽象的人間的労働という形態において社会的に通用する独自の形態をもつという事柄を混同してはならない。

第五に、抽象的人間的労働の認識を可能とする特殊歴史的な社会的条件を抽象的人間的労働の存在条件と混同してはならない。

第六に、抽象的人間的労働の対象化としての価値が資本として主体化し、もっぱら価値増殖の観点から具体的有用労働が編成されるようになるという意味での労働の「抽象化」を、抽象的人間的労働という概念それじたいと混同してはならないということである。

以下、それぞれの点について検討していくことにしよう。

2. 抽象的人間的労働は労働が私的労働としておこなわれる場合にだけ価値を形成する

多くの論者は、たとえば引用文（「すべての労働は、一面では、生理学的な意味での人間の労働力の支出であり、同じ人間の労働あるいは抽象的人間的労働というこの属性においてそれは商品価値を形成する」）などから、抽象的人間的労働は常に価値を形成するものだと思い込んでいる。しかし、これは誤りである。たしかに、マルクスが引用文のように何の留保もせずに抽象的人間的労働が価値を形成すると書いている場合もある。だが、これはあくまで商品生産関係を前提としたうえでの叙述であり、たんに前提としての社会的条件が省略されているにすぎない。

じっさい、マルクスは抽象的人間的労働が価値を形成するのはある特定の社会的条件のもとでしかないことを明確に述べている。

「労働生産物はどうような社会状態においても使用対象であるが、労働生産物を商品に転化するのには、ただ、使用物の生産において支出された労働を、その使用物の「対象的」属性として、すなわちその使用物の価値として表す歴史的に規定された一つの発展の時期だけである」(MEGA II/6, S. 93)

この引用文の文脈では、「使用物の生産において支出された労働」が抽象的人間的労働を意味することは明らかである。というのも、ここで言われる「使用物の生産において支出された労働」は「使用物の価値」として対象化されうる労働だからである。マルクスは、この抽象的人間的労働が対象化され、労働生産物の属性になるのは「歴史的に規定された一つの発展の時

期だけ」であり、そのような時期にだけ労働生産物が商品に転化すると述べているのである。マルクスが繰り返し述べているように、まさにこのようにして抽象的人間的労働が生産物に対象化され、生産物の对象的属性として表示されたものこそが、価値にほかならない。「したがって、ある使用価値あるいは財が価値をもつのは、抽象的人間的労働がそれに対象化されているからにほかならない」(MEGA II/6, S. 72)

抽象的人間的労働を特殊歴史的なもののみならず見解の多くは、抽象的人間的労働それじたいと、抽象的人間的労働が生産物に対象化され、凝固したものである価値を明確に区別することができていない。抽象的人間的労働、すなわち人間の労働力一般の支出としての労働は、それじたいとしては労働がもつ歴史貫通的な性格であり、なんら特殊歴史的なものではない。しかし、「歴史的に規定された一つの発展の時期」においては、抽象的人間的労働が生産物に対象化され、その对象的属性となり、価値という形態をとるのである。それゆえ、抽象的人間的労働それじたいは、人間たちが自然と人間との間の素材変換を媒介する行為、すなわち労働を行うかぎりでかならず存在する、歴史貫通的な労働の属性であるが、他方、抽象的人間的労働の対象化としての価値は特殊歴史的な形成物だということになる。つまり、抽象的人間的労働は、ある特定の社会的条件のもとでのみ、価値として対象化されうるのである。

では、どのような社会的条件のもとで、抽象的人間的労働は価値として対象化されるのだろうか。マルクスは次のように述べている。

「さまざまな種類の使用価値または商品体の総体には、同じように多様な、属、種、科、亜種、変種を異にする有用労働の総体——社会的分業が現れている。社会的分業は商品生産の实在条件である。もっとも逆に、商品生産は社会的分業の实在条件ではない。古インドの共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物は商品になっていない。あるいは、もっと手近な例をあげれば、どの工場も労働は体系的に分割されているが、この分割は労働者たちが彼らの個人的生産物を交換することによって媒介されているのではない。自立的な、そして互いに独立な私的労働の生産物だけが商品として互いに相対するのである」(MEGA II/6, S. 75)

「およそ使用対象が商品になるのは、使用対象が互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。生産者たちは彼らの労働生産物の交換を通してはじめて社会的接触にはいるから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換の内部ではじめて現れる。あるいは、私的諸労働は、交換が労働生産物を結びつけ、そして労働生産物を媒介として生産者たちを結びつける諸連関をとおして、事実上はじめて、社会的総労働の諸分枝として自己を発現する。だから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関連は、それがいまあるがままに現

れる、すなわち、諸人格の、彼らの労働における直接的な社会的関係としてではなく、むしろ諸人格の物象的關係および諸物象の社会的関係として現れるのである。

労働生産物は、それらの交換のなかではじめてそれらの感性的に異なった使用対象性から分離された社会的に同等な価値対象性を受け取るのである」（MEGA II/6, S. 103 104）

以上から明らかなように、労働生産物が商品となるのはそれが私的労働の生産物である場合だけである。もちろん、ここでいう私的労働とはたんに生産者が社会から孤立して労働するということを意味するのではなく、社会的分業の一部分を構成しながら、互いに独立しておこなわれる労働のことである。したがって、私的労働によって社会的分業を構成しなければならないという社会的条件のもとでは、それらの労働生産物は商品となる、ということができる。すでにみたように、労働生産物が商品となるのは「使用物の生産において支出された労働を、その使用物の「対象的」属性として、すなわちその使用物の価値として表す」場合だけなのであるから、このことは、同時に、労働が私的労働として行われる場合にだけ抽象的人間的労働は対象化され、価値となるということの意味する。

引用文はこのことについて比較的詳しく述べている。まず、私的労働をおこなう生産者たちは、互いに人格的なつながりをもたず、孤立している。だから、彼らは「彼らの労働生産物の交換を通してはじめて社会的接触にはいる」ことができる。つまり、彼らは互いに人格的紐帯をもっておらず、直接に社会的関係を取り結ぶことはできないが、自分たちの生産物を媒介として互いに社会的な関係を取り結ぶことができる。私的生産者の労働は直接には社会的意味を持たないが、その生産物である労働生産物は、それが社会的使用価値をもっていれば、他人の欲求の対象となることができるからである。このように、私的労働は、労働生産物の交換をつうじて他人の欲望を満たすということによって、事後的、間接的に、その有用労働としての社会的性格を確証するのである。

だが、まだ問題は解決されていない。というのも、社会的使用価値をもつ労働生産物を交換する際に、どのような基準で交換すればよいのかという困難に直面するからである。使用価値としては労働生産物はどれも全く違っており（そもそも使用価値が違わなければ互いに交換関係に入ることはない）、使用価値は互いに比較できるような交換の基準にはならない。では、この困難はどう解決されるのか。

マルクスが『資本論』商品章の冒頭で確認しているように、交換関係の内部における異なる商品の共通性は、その具体的形態を問わず、人間的労働力が支出され、生産されたという点にしかない⁵⁾。それゆえ、商品交換における商品の共通性は、抽象的人間的労働の対象化である

5) 商品章第一節において、マルクスはおおむね次のように、抽象的人間的労働の対象化としての価値を導出している。まず、商品交換が存在するという事実から出発し、二つの異なる商品、たとえば小麦と鉄が交換される場合を考える。そのさい、小麦と鉄は使用価値としてはまったく異なるものであ

という点に求めるほかない。

だが、他方、マルクスが指摘するように、「人間の労働そのものは、ただ、人間の労働力が特定の形態で支出されるときにだけ、特定の労働として実現され、対象化されることができる。なぜなら、ただ特定の労働にたいしてのみ、自然素材は、すなわち労働がそれにおいて対象化される外的な物質は、相対するのだからである」(MEGA II/5, S. 31)。つまり、人間は、労働の具体的形態から独立に、抽象的人間的労働だけを行うことはできない。素材的にみれば、労働はつねに具体的有用労働として行われ、労働対象の素材的形態の変化というかたちで対象化されるほかない。現物形態における人間の労働力の支出それじたいによっては、抽象的人間的労働そのものを生産物に対象化することはできないのである。じっさい、労働生産物の現物形態から見て取ることができるのは、具体的有用労働によって変形された労働対象の感性的存在だけである。

では、抽象的人間的労働の対象化はいかにしてなされるのか。それを可能にしているのが、私的生産者たちの労働生産物に対する一定の様態での関わり *Verhalten* にほかならない。私的生産者は私的労働の生産物にたいして、抽象的人間的労働の対象化 = 価値をもつ物とするよ

り、それらの使用価値は両者の交換の基準にはならないのだから、二つの商品には使用価値と異なる第三の共通物が存在しなければならない。そこで、それらから使用価値を捨象すると、そこに残っているのは労働生産物という属性だけである。しかも、すでに使用価値を捨象してしまっているのだから、残っているのは特定の具体的労働の生産物であるという属性ではなく、具体的形態を捨象された、区別のない人間の労働の生産物であるという属性でしかない。それゆえ、商品交換の基準となる第三の共通物となりうるのはこの属性、すなわち抽象的人間的労働の対象化としての属性であり、それをマルクスは価値と呼んだのである。

なお、以上の価値の導出を正確に理解するためには、次の点に留意しておかなければならない。それは、ここで登場する使用価値はすでに商品であるということである。抽象的人間的労働は、どのような社会形態においてであろうと、具体的有用労働からその具体的形態を捨象すれば得ることができる。ところが、価値はそうではない。小麦と鉄の両者から使用価値を捨象して抽象的人間的労働の対象化 = 価値という共通物を得ることができるのは、小麦と鉄が商品である場合だけである。たしかに、どんな社会形態においても、小麦と鉄を比較して、それらがいずれも抽象的人間的労働の産物であるという共通の規定を得ることはできるだろう。だが、商品生産社会以外ではこの規定は、基本的に社会的意義を持たない。なぜなら、後述するように、そこでは抽象的人間的労働の社会的性格が人格の関係において直接に考慮されるからである。しかも、具体的有用労働と異なり、抽象的人間的労働は現物形態として対象化されることもない。私的労働の生産物を互いに付き合わせて交換しなければならない社会においてはじめて、抽象的人間的労働の産物であるという生産物の規定が現実的な意味をもちうるのである。

ただし、マルクスがいう「共産主義社会の第一段階」においては、いまだ生産者たちが「ブルジョアの権利」とらわれているので、労働生産物の取得量によって、労働を動機づけなければならない。そのため、労働生産物がもつ抽象的人間的労働の産物としての規定性が、個々人の労働量に対応する生産物の配分を実現する際に、一定の意義をもつ。だが、この場合でさえも、抽象的人間的労働の産物としての規定性は、価値の場合のように生産物の自立的な力として通用することはなく、アソシエーションによる生産物分配の際に限定的な意義をもつにすぎない。

うにして関わり *sich verhalten*, 労働生産物に「それらの感性的に異なった使用対象性から分離された社会的に同等な価値対象性」を与えることによって、先に述べた困難を解決しているのである⁶⁾。つまり、私的生産者たちは使用価値としては全く異なる労働生産物にたいして抽象的人間的労働の対象化 = 価値という共通の社会的属性を与えるようにして関わり、そのことによって異なる使用価値のあいだに価値という共通の基準を打ち立て、両者を交換することを可能にしている。したがって、3で詳説するように、抽象的人間的労働の対象化としての価値は、人間たちが私的労働の生産物にたいして、その生産に支出された抽象的人間的労働に対応する交換力をもつ物として扱うかぎりでのみ成立する、純粋に社会的な属性にほかならない。

もちろん、私的生産者たちは以上のような関わりを自覚的におこなうわけではない。私的労働によって社会的分業を成立させなければならないという社会的条件に強制されて、無自覚のうちにこれを行っているのである。

実は、このような私的生産者たちの関わりによって生み出された価値においてはじめて、私的労働は抽象的人間的労働として独自の社会的性格を獲得し、また、抽象的人間的労働としての社会的性格を確証することができる。こうして、私的労働の具体的有用労働としての社会的性格を商品の使用価値において事後的、間接的に確証し、また、私的労働が商品価値において独自の社会的性格を獲得することをつうじて、私的労働の抽象的人間的労働としての社会的性格を価値において事後的、間接的に確証するのである。この点に関しては4及び5においてさらに詳しく見るだろう。

3. 抽象的人間的労働はそれじたいとしては素材的なものであるが、その対象化である価値は人間たちの関わり *Verhalten* の産物であり、純粋に社会的なものである

すでに見たように、抽象的人間的労働は、それじたいとしてみれば、生理学的な意味での人間の労働力の支出であり、素材的なものである。ところが、抽象的人間的労働の対象化である価値のほうはそうではない。それは「純粋に社会的なもの」である。

6) この場合にかぎらず、ある物や人格がもつ社会的力は、他の諸個人の一一定の様態での関わり方の産物である。これについては後に詳論するが、さしあたり次の通俗的な説明を参照されたい。「たとえば、王と臣下の関係を考えてみよう。Aが王であり、Bが臣下だとする。このとき、Aが王としてBにたいして命令を下すことができるのは、BがAを王だと認めて従うかぎりではない。つまり、Aが王であるのは、BがAにたいしてAを王だとするように関わっているからである。もしBがAを王だと認めなければ、Aが王であり、Bが臣下であるという関係はなりたたなくなってしまう。このように、BのAにたいする特定の様態での関わり方が、Aに特定の性質を与え、AとBとのあいだに特定の関係を作り上げているのである」(拙著『私たちはなぜ働くのか』旬報社、2012年、26頁)。

「商品体の感性的にがさがした対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一原子の自然素材も入っていない。したがって、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえない。とはいえ、諸商品はただそれが同じ社会的な統一性 *Einheit*、すなわち人間的労働の表現であるかぎりでのみ、価値対象性をもつということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的なものであることを思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的関係のうちにはしか現れえないということもまた自ずから明らかである」(MEGA II/6, S. 80)

ここから、しばしば次のような疑問が提起されることになる。「抽象的人間的労働は素材的なものであるのに、どうしてその対象化である価値は純粋に社会的なものでありうるのか？」と。たとえば、廣松渉は以上のように問題を立てたうえで、抽象的人間的労働はじつは価値と同様に「純粋に社会的なもの」であり、マルクスが「生理学的云々」という記述をしているのはいわば理解を媒介するための暫定的な措置にすぎないと主張する。だが、このような問題の立て方じたいが事柄にたいする完全な無理解を示すものにほかならない。

抽象的人間的労働は、人間と自然との物質代謝を媒介する行為である労働を生理学的な意味での人間的労働力の支出という側面からのみ捉えたものであるが、抽象的人間的労働の対象化としての価値は私的生産者たちの関わり *Verhalten* によって生み出されるものであり、両者はまったく異なるものである。じっさい、マルクスは価値が抽象的人間的労働と同じものだとはどこにも書いていない。マルクスが抽象的人間的労働を価値と関連づけるときには、常に、価値は抽象的人間的労働の対象化、あるいは凝固、膠着物であると書いているのである。

にもかかわらず、抽象的人間的労働とその対象化である価値を同一視してしまう論者が後を絶たない⁷⁾。このことは、同時に、価値が「純粋に社会的なもの」であるということの意味を全く理解していないということの意味する。というのも、第一に、そうした論者は「純粋に社会的なもの」を「関係」という概念によって漠然と捉えるだけであり、そもそも「純粋に社会的なもの」がなぜ、いかにして形成されているのかをまったく問わない。第二に、彼らにとっては、素材的なものと社会的なものは常に単純に二分できるものであり、一定の関係のもとでは素材的なものそれじたいが社会的性格をもつことを考慮せず、「純粋に *rein*」という副詞に込められた意味を看過してしまう。

7) 好例が日山紀彦『抽象的人間労働の哲学』御茶の水書房、2006年である。日山は抽象的人間的労働とその対象化である価値をほぼ同一視し、マルクスのなかに「自家撞着」を見いだしている。また、ミヒャエル・ハインリッヒも無意識的に両者を同一視しまっているが、そのことは「抽象的労働はおよそ「支出される」ことができない。抽象的労働は、交換において構成された通用関係である」(Michael Heinrich, *Kritik der politischen Ökonomie*, Schmetterling Verlag, 2005, S. 49) という奇妙な文章において端的に示されている。およそ支出されることができず、しかも交換において構成された通用関係をなすものは、抽象的労働ではなく、その対象化としての価値にほかならない。

まず、「純粋に社会的なもの」とマルクスが言っていることの意味を正確に理解する必要がある。マルクスが「純粋に」という副詞をわざわざ付けているのは、純粋ではないが社会的なものが存在するということを示唆していると言えるだろう。そのような「不純に社会的なもの」の代表例は商品がもつ社会的使用価値である。マルクスは『資本論』において次のように述べている。

「商品を生産するには、彼は、使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値、すなわち社会的使用価値を生産しなければならない」(MEGA II/6, S. 74)

この「他人のための使用価値」をどう解釈するかは議論の分かれるところであろう。これを解釈するにあたっては、後年の「ヴァーグナー評注」における記述が直接に参考になる。というのも、そこでマルクスは、「社会的使用価値」について述べた先の引用文を引用した後に、次のように述べているからである。

「それ [引用者注：社会的使用価値] によって、使用価値——「商品」の使用価値としての——はそれじたい歴史的に特殊な性格をもつ。たとえば生活手段が共同的に生産され、共同体成員のあいだに分配される原始共同体においては、共同生産物が直接にそれぞれの共同体成員の、それぞれの生産者の生活欲求を満たすのであり、ここでは生産物の、使用価値の社会的性格はその (共同の) 共有的性格のうちにある」(MEW 19, S. 370)

さらに同じ評注の別の箇所では次のように述べている。

「本文の48ページにこうある。

「ただ一種類の価値があるだけであり、それは使用価値である。これは個人的使用価値であるか、社会的使用価値であるか、どちらかである。前者は社会組織には全然関わりなく、個人と彼の欲望とに対立する」

(.....ところでロートベルトゥスが、現実に使用対象として個人に対立する使用価値は、その個人のための個人的使用価値としてその個人に相対するというくだらぬことを言いたいだけなら、それはくだらぬ同義反復か、そうでなければ間違いである。なぜなら、米、トウモロコシ、または小麦のような物とか、肉 (これはヒンズー教徒には食料として相対しない) とかはさておき、教授または枢密顧問官の称号や勲章に対する欲望は、ただまったく特定の「社会組織」においてだけ個人にとって存在しうるものだからである。)

「第二のものは、多数の個別的有機体 (すなわち個人) からなりたつある社会的有機体もつ使用価値である」

りっぱなドイツ語だ！ ここで問題になっているのは、「社会的有機体」の使用価値、すなわちある「社会的有機体」の占有している使用価値（たとえば原始共同社会における土地のような）なのか、あるいは、たとえば商品生産が支配的で、その生産者が供給する使用価値が「他人のための使用価値」でなければならない、この意味で「社会的使用価値」でなければならないような、ある社会的有機体における使用価値の特定の「社会的」形態なのか？

こんな空っぽな中身ではなんの役にも立たない」（MEW 19, S. 373 374）

「このように商品の「価値」があらゆる社会形態に実在するものの特定の歴史的形態にすぎぬとすれば、商品の「使用価値」を特徴付ける「社会的使用価値」もやはりそうである」（MEW 19, S. 375 376）

以上の引用文から明らかなように、「他人のための使用価値」の「他人」とはたんに自分と異なる人格のことを意味するのではない。そうではなく、ここでいう「他人」は、共同社会に存在するような人格的紐帯をもたない他人のことを意味しているのである。したがって、「社会的使用価値」とは私的個人としての他人の欲求を満たす使用価値のことにほかならず、人格的紐帯のかわりに私的生産者のあいだを媒介するという特殊歴史的な役割を果たしている。だからこそ、「社会的使用価値」は「商品の「使用価値」を特徴付け」、「それじたい歴史的に特殊な性格をもつ」と言われるのである。

言うまでもなく、使用価値は第一義的には素材的なものである。「ある物の有用性は、その物を使用価値にする。しかし、この有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、商品体の諸属性に制約されており、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄や小麦やダイヤモンドなどという商品体そのものが、使用価値または財なのである。……使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわらず、富の素材の内容をなしている」（MEGA II/6, S. 70）。しかし、他方、使用価値は鉄や小麦やダイヤモンドという物体の存在だけで成立するものではない。それは、物体の属性に制約されているとはいえ、人間の欲求の対象となったときにはじめて使用価値となることができるのである。

このことから、使用価値は二つの意味で特殊歴史的な性格をもつことになる。

第一に、同じ物であったとしてもそれが人間のなんらかの欲求を満たす使用価値でありうるのか、あるいは、どのような人間の欲求を満たすのかは、社会の歴史的な発展段階や文化によって異なる⁸⁾。

第二に、同じ使用価値であったとしてもそれが社会のなかでどのようにして欲求をみたすの

8) さらには、マルクスが で指摘しているように、特定の社会が生み出す地位や名誉が欲求の対象となり、使用価値となることすらある。だが、このような形態での使用価値は、生産様式じたいを考察の対象とする場合には、さしあたり考察の対象外としてよい。

かは、その社会の性格に規定されているということである。たとえば、共同体の成員が共同労働によって生産した使用価値は、共同的な性格をもつ使用価値として直接に共同体成員の欲求を満たすであろう。これにたいし、商品の使用価値は、人格的つながりをもたない「他人」の欲求の対象となり、それらの使用価値同士の交換を通じて私的個人の欲求を満たすだろう。このように、同じ使用価値であっても、社会形態の違いにより、使用価値がそれ自体としてもつ社会的意義が異なってくる。だからこそ、マルクスは商品の使用価値がたんなる使用価値ではなく、「社会的使用価値」であることを強調したのである。つまり、使用価値はなによりもまず富の素材的内容であるが、それが人間たちの欲求の対象としてはじめて存在しうるものであるかぎり、素材的でありながら、同時になんらかの社会的な意義、社会的な性格をもつことができる。商品の場合、それは「社会的使用価値」として現れることになる。

これにたいして、商品がもつ価値という属性は「純粋に社会的なもの」であり、「富の素材的内容」である使用価値とは全く違っている。もちろん、価値もその素材的担い手を必要とするという意味では使用価値に制約されている。そもそも使用価値がなければ労働生産物が交換されることはなく、したがって異なる使用価値の交換を媒介する価値も必要とされない。しかし、商品がもつ価値という社会的力は「富の素材的内容」に由来するものではまったくない。「商品の価値対象性には一原子の自然素材も入っていない」。それは人間たちの関わりによってのみ生み出される「純粋に社会的なもの」である。

大谷禎之介が詳論しているように、マルクスは“S verhält sich zu O als N.”や“S bezieht sich auf O als N.”という表現をもちいて、「主体 S が客体 O に対して特定の様態 (N にたいする様態) で関わる」ということを至る所で述べている⁹⁾。マルクスはそれによって客体がもつ社会的形態規定性が主体の能動的な「関わり Verhalten」によって形成されることを示そうとした。とりわけ草稿類ではこのことがはっきりと見て取れるが、叙述が一般向けに修正された『資本論』においても、こうした「関わりの論理」を見ることができる。もっとも典型的なのは価値形態論であるが、物神性論においても次のように述べられている。「商品生産者の一般的な社会的生産関係は、彼らの生産物にたいしてそれを商品とするようにして関わり、したがって価値とするようにして関わり、この物象的な形態において彼らの私的労働を同等な人間的労働として互いに関連させようということにある」(MEGA II/6, S. 109)。それゆえ、たとえば、共同社会のように人格的紐帯にもとづいて労働の配分と生産物の分配を行っている社

9) 大谷禎之介『マルクスのアソシエーション論』桜井書店、2011年、第3章補論2を参照。

なお、このような「関わり」は、価値や等価形態のような、対象がもともと持っていなかった社会的形態規定を生み出すだけではない。後の引用文でも登場するように、対象を、対象がもっている一つの属性へと還元するという働きもする。たとえば、「人間が有用労働にたいしてそれを抽象的人間的労働とするようにして関わる」というような場合がそれである。抽象的人間的労働はもともと有用労働がもっている属性であるが、人間の関わりにより、有用労働の具体的形態が捨象され、この関係の内部では、抽象的人間的労働としての意義しか持たないものになるのである。

会では、自分たちの生産物にたいしてそれを価値物として、したがって商品とするようにして関わる必要はなく、それゆえ労働生産物が価値を持ち、商品となることはない。価値は、私的生産者たちが生産物に対してそれを価値物とするようにして関わる限りでのみ、存在するものである。

このように、価値は私的生産者たちの生産物にたいする一定の関わりによってのみ生み出されるものであり、生産物の対象的属性であるとはいえ、使用価値のように現物形態をとることはない。あくまでも諸個人による関わりによって形成された社会的力であり、そのような関わりを継続しているかぎり、現実には私たちの諸実践に大きな影響を与えずにはいないにもかかわらず、現物形態においては現象してこない。だからこそ、マルクスが言うように、抽象的人間的労働の対象化である価値は「まぼろしのような対象性」(MEGA II/6, S. 72)なのであり、この目に見えない対象的属性は他の商品の使用価値によって自分の価値を表現するという価値形態を取らざるをえないのである¹⁰⁾。

マルクスは『資本論』第一巻初版において価値対象性が「まぼろしのような対象性」にならざるをえないことを次のように説明している。

「それじしん抽象的であり、それ以上の質や内容をもたない人間的労働の対象性は必然的に抽象的な対象性、ひとつの思考産物である。リンネルの生産においては、人間的労働力の一定量が支出されている。こうして亜麻織物は幻想となる。……その価値はそのように支出された労働の対象的反射であるが、リンネルの身体に自分を反射してはいない」(MEGA II /5, S. 30)

ここで言われる「抽象的な対象性」が「まぼろしのような対象性」と同義であることは明らかであろう¹¹⁾。有用労働の場合にはそれが使用価値に対象化されることは自明である。しかし、

10) 価値形態が、私的な具体的労働を抽象的人間的労働として社会的に通用する形態にする際に果たす役割については5で扱う。

11) なお、ここでマルクスは同時に「思考産物」という言葉も用いているが、これについては若干の注意が必要である。これを解釈する際に参考になるのは『61-63年草稿』における次の一節である。「価値は人間が互いに彼らの諸労働にたいして、それを同等かつ一般的な諸労働として、またこの形態において社会的である労働とするようにして関わりあう、ということに基づいている。これは、人間のすべての思惟がそうであるように、一つの抽象であり、また人間が思惟し、感性的統一性や偶然性を捨象する能力をもつ限りで存在する社会関係である」(MEGA II/3, S. 210)。このように、価値は他ならぬ人間の思惟力、抽象力に基づいており、そのような能力ゆえに人間は私的生産物にたいしてそれを価値物とするように関わるができる。価値が「思考産物」だと言われるゆえである。しかし、それにもかかわらず、人間たちはそのような関わりを諸条件に強制されて「本能的」に行うだけであり、それによって実際にどのような社会的行為を遂行しているのかについては無自覚なのである。彼らが無意識のうちに形成する関係はその現象形態のままに彼らの意識に反映されるだけであり、彼

他方、そのような有形的形態を捨象した抽象的人間的労働は、依然として素材的なものであるとはいえ、すでに抽象的なものであり、物的な形態で対象化することができるものではない¹²⁾。したがって、その対象性は「抽象的な対象性」とならざるをえない。つまり、抽象的人間的労働の対象化である価値は「純粋に社会的なもの」とならざるをえない。

だが、まだ問題は解決されていない。というのは、抽象的人間的労働は、たとえ労働の有形的形態を捨象された抽象物であるとしても、それじたいは依然として素材的なものでしかなく、なぜその素材的なものを「純粋に社会的なもの」である価値において表すことができるのか、という問題が残っているからである。たしかに、素材的なものそれじたいはどこまでいっても素材的なものであり、たんなる素材的なものを「純粋に社会的なもの」として表現することはできないし、したとしても何の意味もない。たとえば、生産者の体重をその労働生産物に「対象化」したとしても、それは何の意味も持たないだろう。抽象的人間的労働の場合も同様に、生理学的な意味での人間的労働力の支出にすぎないのだから、この生理学的意味での労働力の支出そのものを「純粋に社会的なもの」として表すことはできそうもないことにみえる。

しかし、この問題についての解決は事実上与えられている。すでにみたように、人間社会においては素材的なものはたんに素材的なものにとどまるとは限らない。使用価値の場合のように、特定の関係のもとでは素材的なものは一定の社会的性格をもつのである。抽象的人間的労働の場合も同様である。抽象的人間的労働じたいは素材的なものでしかないが、人間社会が社会的分業を成立させているところでは社会的再生産にとってある一定の社会的意義、社会的性格をもつ。このように抽象的人間的労働が一定の社会的性格を持つところでは、素材的なもの

らはその関係の内実を意識していない。この事情をマルクスは『資本論』第一巻初版において次のように説明する。「彼らの生産物を互いに商品として関連させるために、人間たちは彼らの相異なる労働を抽象的人間的労働に等置することを強制されるのである。彼らはそれを知らないが、物質的な物を価値という抽象に還元することによって、それを行う。これは彼らの脳髓の自然発生的な、したがって無意識的な、本能的な働きであり、この働きは彼らの物質的生産の特殊な様式から、そしてこの生産が彼をその中に置くとする諸関係から必然的に生育する」(MEGA II/5, S. 46)。さらに、『6163年草稿』においても同様のことが述べられている。「生産者をして自分たちの生産物を商品として売ることを強制する同じ（たとえ精神に影響するとしても、精神とは独立な）事情——社会的生産の一形態を他のそれから区別する事情——が、彼らの生産物に（彼らの精神にとってまた）使用価値とは独立な交換価値を与えるのである。彼らの「精神」、彼らの意識は、なにによって実際に自分たちの商品の価値が規定され自分たちの生産物が価値として規定されるのか、ということをおそらくまったく知る必要がないし、彼らの意識にとっては存在する必要もない」(MEGA II/3, S. 1346)。

- 12) 注意が必要なのは、抽象的人間的労働は感性的定在形態をもたないとはいえ、それが素材的なものである限りで、感性的にまったく把握できないものではないということである。「価値の大きさの規定の基礎にあるもの、すなわち右のような支出の継続時間または労働の量について言えば、この量は労働の質から感覚的にも区別されうるものである」(MEGA II/6, S. 102) と言われるように、抽象的人間的労働のおおよその量は感性的定在を持つ有用労働の継続時間と強度から把握することが可能である。

でありながら、社会的意義をもつ抽象的人間的労働を「純粹に社会的なもの」として表示することは可能であり、現実的な意味をもつのである。

では、抽象的人間的労働は社会的分業においてどのような社会的意義、社会的性格をもつのだろうか。この点について4及び5において詳しく検討することにしよう。

4. それじたいとしては素材的なものでしかない抽象的人間的労働は、人間たちが社会的分業を営んでいる場合には、ある社会的性格をもつ

(1) 抽象的人間的労働はどのような社会的性格をもっているのか

抽象的人間的労働は、労働が社会的分業の一分肢をなすかぎり、いわば歴史貫通的にある社会的性格をもっている。マルクスは『資本論』商品章の物神性論において、この点について本質的なことを述べている。以下、物神性論のなかでとりわけ関連する箇所をみていくことにしよう。

「したがって、商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じるのではない。それはまた、価値規定の内容から生じるのでもない。というのは、第一に、有用的労働または生産的活動が互いにどんなに異なっても、それらが人間的有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容や形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、ひとつの生理学的真理だからである。第二に、価値の大きさの規定の基礎にあるもの、すなわち右のような支出の継続時間または労働の量について言えば、この量は労働の質から感覚的にも区別されうるものである。どんな状態のもとでも、人間は——発展段階の相違によって様ではないが——生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった。最後に、人間がなんらかの様式で互いのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的形態を受け取る」(MEGA II/6, S. 102-103)

ここで、マルクスは「価値規定の内容」、すなわち抽象的人間的労働が質的、量的、社会形態的にもつ意味を確認している¹³⁾。社会形態的な意味については5で考察するから、質的、量的な意味についてだけ確認しておこう。

13) なお、『資本論』第一巻初版においては「それじたいとして考察された価値規定」(MEGA II/5, S. 44)となっていた箇所が、第二版では「価値規定の内容」に書き換えられている。このようにマルクスは、しばしば価値規定という言葉によって「価値規定の内容」、すなわち価値の実体である抽象的人間的労働の諸性格について述べているが、これを価値じたいの規定性と混同してはならない。価値はあくまでも抽象的人間的労働の対象化であり、抽象的人間的労働と同じではない。

まず、質的な面からいえば、あらゆる労働は「有用的労働または生産的活動が互いにどんなに異なっても、それらが人間的有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容や形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、ひとつの生理学的真理」であり、この限りで人間にとって等しい意義をもつものだということができる。もちろん、人間たちは社会形態の違いによって、このことを明確に意識したり、逆に意識しない場合もあるだろう。とはいえ、どんな労働も人間的労働力の支出を伴わざるをえないのだから、意識的であれ、無意識的であれ、生理学的な意味での人間的労働力の支出としては等しい意義をもたざるをえない。たとえば、ある人が机を生産しようが、あるいは上着を生産しようが、それが一定の労力の支出であるかぎり、その人にとっては同じように時間を費やし、疲労を与えるのであり、残りの自由時間が削られ、休息する必要をもたらすことには変わらない。

次に、量的な面についてみると、抽象的人間的労働の量は労働時間や労働の強度として現れるのだから、「この量は労働の質から感覚的にも区別されうるもの」である。このような抽象的人間的労働の量は、それぞれの生産者にとっては時間をどれだけ費やすのか、その生産者にどれだけ疲労を与えるのかを規定するのだから、「どんな状態のもとでも、人間は——発展段階の相違によって一様ではないが——生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった」のである。

では、以上のような価値規定の内容、すなわち抽象的人間的労働の質的および量的意義は、人間たちが社会的分業を営んでいる社会ではどのような意味をもつのだろうか。マルクスはこのことを「ロビンソン物語」と農民家族、アソシエーションの三つの例をあげて説明している。第二版では、この三つの例と先の引用文の場所が離れているので直接的な関連がつかみづらいが、初版では引用文とほぼ同様の段落のあとに「ロビンソン物語」とアソシエーションという二つの例が直接に続いており¹⁴⁾、これらの例が価値規定の内容を具体的に説明するものであることは明らかであろう。

まず、「ロビンソン物語」の例から見ていこう。

「ロビンソンの生産的機能は様々に異なっているけれども、彼は、それらの機能が同じロビンソンの様々な活動形態にほかならず、したがって、人間的労働の様々な様式に他ならないことを知っている。彼は必要そのものに迫られて、彼の時間を彼のさまざまな機能のあいだに正確に配分しなければならない。彼の全活動のなかでどの機能がより大きい範囲を占め、どの機能がより小さい範囲を占めるかは所期の有用効果の達成のために克服されなければな

14) 初版では、農民家族とヨーロッパの中世の例は書かれていない。なお、ヨーロッパの中世の例はおもに労働の社会的形態にかかわる叙述であるので、ここでは取り上げない。

らない困難の大小によって決まる。経験が彼にそれを教える。そして、わがロビンソンは、時計と帳簿とインクとペンとを難破船から救い出しているのです、立派なイギリス人らしく、やがて自分自身のことを帳簿につけ始める。彼の財産目録には彼が所有する諸使用対象と、それらの生産に必要とされるさまざまな作業と、最後に、これらのさまざまな生産物の一定分量のために彼が平均的に費やす労働時間との一覧表が含まれている。ロビンソンと彼の手製の富である諸物とのあいだのすべての関連は、ここではきわめて簡単明瞭であって、M・ヴィルト氏でさえ、とりたてて頭を痛めることなしに理解できたほどである。にもかかわらず、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれているのである」(MEGA II/6, S. 107)

ここでのポイントは二つである。一つは、ロビンソンがおこなう様々な労働は、その具体的形態の違いにもかかわらず、同じ「人間的労働の様々な様式に他ならない」ということである。ロビンソンにとっては、どんな有用労働であれ、人間的労働としては、すなわち時間と労力を費やすものとしては同じ意義をもっている。もう一つは、「彼は必要そのものに迫られて、彼の時間を彼のさまざまな機能のあいだに正確に配分しなければならない」ということである。つまり、ロビンソンは自分の必要とするものを生産するために、なんらかの労働を行うことができる時間を、それぞれの必要量と生産の困難におうじて¹⁵⁾、適切に配分しなければならない。そうでなければ、ロビンソンは自分の欲求を満ちし、自分の生活を再生産していくことができないだろう。なぜなら、ロビンソンにとって、どんな形態の有用労働をするにしろ、自分の時間と労力を費やす人間的労働であることにはかわりなく、したがってそれらの総量には限度があり、この有限な労働を適切に配分することによってしか、自分の生活に必要なものを手に入れることができないからである。

これじたいはロビンソン一人の生産活動の例でしかないとはいえ、マルクスが「価値のすべての本質的規定が含まれている」と述べているように、社会的分業をおこなっている社会にも本質的に妥当することが言われていると考えてよい。社会的分業をおこなっている社会の例としてあげられている農民家族とアソシエーションの場合を次にみてみよう。

「自家用のために、穀物、家畜、糸、リンネル、衣服などを生産する農民家族の素朴な家父長的な勤労が、[引用者注：共同的な、すなわち直接的に社会化された労働のための] も

15) 言うまでもなく、「所期の有用効果の達成のために克服されなければならない困難の大小」、すなわち一定の必要物を手に入れるための抽象的人間的労働の量の大小は生産力によって規定される。逆に言えば、生産力は抽象的人間的労働なしには考えることのできない概念であり、このこともまた抽象的人間的労働を特殊歴史的なものとみなす見解の誤りを端的に示している。というのも、マルクスにおいて生産力が歴史貫通的な概念であることは自明だからである。なお、マルクスの生産力概念はここで述べた意味に限定されない射程をもつが、この点については拙著『私たちはなぜ働くのか』第6章を参照されたい。

っとも手近な一例をなす。これらの様々な物は、家族に対してその家族労働のさまざまな生産物として相対するが、それら自身が互いに商品として相対することはない。これらの生産物を生み出すさまざまな労働、農耕労働、牧畜労働、紡績労働、織布労働、裁縫労働などは、その現物形態において社会的機能をなしている。なぜなら、それらは、商品生産と同じようにそれ独自の自然発生的分業をもつ家族の諸機能だからである。男女の別、年齢の相違、および季節の推移につれて変わる労働の自然的諸条件が、家族のあいだでの労働の配分と個々の家族成員の労働時間とを規制する。しかし、ここでは継続時間によってはかられる個人的労働力の支出が、はじめから、労働そのものの社会的規定として現れる。個人的労働力は、はじめから、家族の共同的労働力の器官としてのみ作用するからである。

最後に目先を変えるために、共同的生産手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々のアソシエーション Verein を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されるが、ただし、個人的にではなく、社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物のもっぱら彼自身の生産物であり、それゆえまた、直接的に彼にとっての使用対象であった。このアソシエーションの総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。この部分は依然として社会的なものである。しかし、もう一つの部分は、生産手段として、アソシエーションの成員によって消費される。この部分は、だから、彼らのあいだで分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに照応する生産者たちの歴史的発展程度に応じて変化するであろう。もっぱら商品生産と対比するためだけに、各生産者の生活手段の分け前は、彼の労働時間によって規定されるものと前提しよう。そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるだろう。労働時間の社会的計画的配分は、さまざまな欲求に対する様々な労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働にたいする生産者たちの個人的関与の尺度として役立つ。それゆえまた、共同生産物のうち個人的に消費されうる部分に対する生産者たちの個人的分け前の尺度として役立つ。人々が彼らの労働および労働生産物にたいしてもつ社会的連関は、ここでは、生産においても分配においても簡単明瞭である」(MEGA II/6, S. 108-109)

まず、マルクスが「ロビンソンの労働のすべての規定が再現される」と述べているアソシエーションの例を見てみよう。アソシエーションは自由な諸個人による意識的なアソシエイトによって成立している社会であるから、「自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する」ことができる。それゆえ、ロビンソンの労働について言われたことが、「個人的にではなく、社会的に」再現される。つまり、ロビンソンにとって様々な有用労働のどれもが人間的労働の特定の様式にすぎず、人間的労働として限度をもつ総労働時間を

自分の必要におうじて適切に配分しなければならなかったように、ここでもまた、各成員の様々な有用労働のどれもが人間的労働の特定の様式にすぎず、成員の人格的結合からなる社会は人間的労働として有限な、その社会の総労働を社会の必要におうじて適切に配分しなければならない¹⁶⁾。そうでなければ、社会は自らの必要を満たし、社会を再生産していくことができないからである。

つぎに、農民家族の場合をみてみよう。ここでも、アソシエーションと同様に、労働は人格的紐帯にもとづく共同体の諸成員によって行われるのであり、「個人的労働力は、はじめから、家族の共同的労働力の器官としてのみ作用する」。だが、独立した自由な人格であるロビンソンや自由な諸個人の自覚的な結合であるアソシエーションとは異なり、自然発生的に形成された人格的紐帯である農民家族は、自分たちの労働を自覚的に配分するのではない。農民家族は「農耕労働、牧畜労働、紡績労働、織布労働、裁縫労働」などの様々な労働をおこなっているが、これらの有用労働に総労働を自覚的に配分するのではなく、「男女の別、年齢の相違、および季節の推移について変わる労働の自然的諸条件が、家族のあいだでの労働の配分と個々の家族成員の労働時間とを規制する」。つまり、歴史的に形成された家父長的伝統や生理学的条件、そして季節などの自然的条件が、農民家族における労働の配分を規制する。しかし、この場合でもやはり、ロビンソンやアソシエーションの場合に「簡単明瞭」に現れてきた事情、すなわちそれぞれの有用労働は人間的労働の特定の様式にすぎず、その人間的労働の総量としての労働時間を必要に応じてそれぞれの有用労働に適切に配分しなければならないという事情は相変わらず妥当する。そうでなければ、農民家族は自分たちの生活を維持していくことができないからである。ただ、農民家族にとっては、労働配分が、彼らにとっては自然必然性の形態をとってあらわれる家父長的伝統や自然条件を媒介としてなかば無自覚的に実現されるので¹⁷⁾、このことが「簡単明瞭」には現れてこないというだけである。マルクスが指摘するように、「社会の可処分労働時間がなんらかの仕方生産を規制するという事は、どんな社会形態でも妨げることはできない」(MEW 32, S. 12)。

以上の考察から、次のことが結論される。どんな社会であれ、各人の有用労働が相互に依存

16) もちろん、この総労働の限度には弾力性があり、それは物理的ないし生理学的要因のみならず、社会的分業の発展の程度や生活習慣・文化などの歴史のおよび社会的条件に依存する。しかし、これらの条件を所与のものとするれば、ある社会における処分可能な総労働は与えられており、この処分可能な総労働の一部を費やさなければならないという意味でどの労働も人間的労働としては等しい意義をもっている。

17) とはいえ、この場合の無自覚は商品生産関係における無自覚とは次元が異なる。前者はあくまで人格的紐帯にもとづいているので、自然発生的な伝統的観念を媒介しているとは言っても、人格的制御から切り離されているわけではない。あくまでも人格的紐帯の編成原理が伝統に媒介されているだけであり、労働の社会的性格は人格的關係において考慮されている。だからこそ、それらの生産物は商品として相対する必要はないのである。

し合う社会的分業を営む社会では、あらゆる労働は、自覚的か無自覚的であるかにかかわらず、抽象的人間的労働としては等しい社会的意義をもっている。なぜなら、どんな成員のどんな形態での有用労働も、抽象的人間的労働として有限な、社会的総労働の一部を費やして行われるという意味では同じだからである。この抽象的人間的労働としての社会的意義は、より具体的には、分業編成の社会的形態にかかわりなく、この有限な総労働を社会の必要に応じてそれぞれの有用労働に適切に配分しなければならないという、労働の社会的配分の必要性として現れる。

商品生産が全面的におこなわれている商品生産社会も、社会的分業の特殊な形態の一つに過ぎないから、以上のことが同様に妥当する。つまり、抽象的人間的労働という労働の素材的属性は商品生産社会においても同様に社会的意義をもつ。ただし、商品生産社会では、アソシエーションや農民家族と違い、人格的紐帯にもとづいて労働の配分と生産物の分配を実現するのではなく、物象的連関を媒介としてこれを実現しなければならない。だから、抽象的人間的労働としての社会的性格は直接には考慮されず、人間たちの関わりによって生み出された価値において表されなければならない。社会の成員にとって有用なものを生産するという有用労働としての社会的性格は、商品の社会的使用価値に表され、社会にとって有限な総労働の一部を費やしたという抽象的人間的労働としての社会的性格は、商品の価値に表される。このように、労働のもつ社会的性格を商品の属性として表すことによって、人間たちは事後的、間接的に労働の社会的性格を考慮し、これをつづいて労働の配分を実現しているのである。

このように、抽象的人間的労働が人間社会においてもつ一定の社会的意義を理解しさえすれば、それ自体としては素材的なものでしかない抽象的人間的労働がなぜ価値という「純粋に社会的なもの」として対象化されるのかは容易に理解できる。社会的分業を営んでいる社会では、それ自体として素材的なものでしかない人間の労働力の支出は、再生産にとって不可欠な労働の配分にかかわる重要な社会的性格をもっており、だからこそ、それは商品の価値性格において表されることができるのである。

マルクスは手紙のなかで、価値という特殊歴史的な形態において表されるものは、抽象的人間的労働が歴史貫通的に——とはいえ、人間社会が社会的分業を営む限りで——もっている社会的性格であることを明確に指摘している¹⁸⁾。

18) 念のために同様の趣旨のマルクスの叙述を以下に挙げておこう。「デューリング氏が価値規定にたいして出している控えめな異論についていえば、彼は第二巻では、価値規定がブルジョア社会では「直接には」ほとんどあてはまらない、ということを知って驚くだろう。じっさい、社会の可処分労働時間がなんらかの仕方では生産を規制するということは、どんな社会形態でも妨げることはいないのだ。だが、この規制が、社会の労働時間にたいする社会の直接的意識的な支配——これはただ共同所有の場合によってのみ可能だ——によってではなく、諸商品の価格の運動によって実現されるあいだは、あいかわらず君がすでに『独仏年誌』のなかでまったく適切に述べたとおりの有様なのだ」(MEW 32, S. 12)。「社会が自己の諸必要全体に即応する生産を達成するためにその時間を合目的

「価値概念を証明する必要があるなどというおしゃべりができるのは、問題になっている事柄についても、学の方法についても、これ以上ないほど完全に無知だからにほかなりません。どんな国民でも、一年はおるか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。同じように、次のことはどんな子供でも知っています。すなわち、それぞれの欲望の量に対応した生産物の量には、社会的総労働のそれぞれ一定の量が必要だ、ということです。社会的労働をこのように一定の割合で配分することの必要性は、社会的生産の一定の形態によってなくなるものではまったくなく、ただその現れ方を変えることができるだけだということは自明です。自然諸法則はおよそなくすことができないものです。歴史的に異なった状態において変わることができるものは、それらの法則が貫徹される形態だけなのです。そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換としてあらわれる社会状態においては、この一定割合での労働の配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にほかならないのです」(MEW 32, S. 552 553)

また、「ヴァーグナー評注」のなかでも同様の趣旨のことが述べられている。

「ロートベルトウスがさらにすすんで価値を調べたとすれば、彼はさらに、価値においては物、「使用価値」は人間的労働のたんなる対象化、同じ人間的労働力の支出として通用し、したがってこの内容が物象の对象的性格として、商品自身に物象的にそなわった性格として表示されているということ、もっともこの対象性は商品の現物形態には現れないということ(そして、このことが特別な価値形態を必要にするのである)、こういうことを発見したであろう。したがって、商品の「価値」は、他のすべての歴史的社會形態にも、別の形態においてではあるが、同様に実在するもの、すなわち労働が「社会的」労働力の支出として実在する限りでの労働の社会的性格を、ただ歴史的に発展した一形態で表現するだけだということを発見したであろう。このように商品の「価値」があらゆる社会形態に実在するものの特定の歴史的形態にすぎぬとすれば、商品の「使用価値」を特徴付ける「社会的使用価値」もやはりそうである。ロートベルトウス氏は、価値の大きさの尺度をリカードから取り入れた。しかし、リカードと同じように、価値そのものの実体を研究しなかったし、あるいは理解しなかったのである。たとえば、互いに結合した労働力の共同有機体としての原始共同社会における共同的性格を、したがってまた彼らの労働、すなわちこれらの力の支出の「共同的」性格を、研究しなかったし、あるいは理解しなかったのである」(MEW 19, S. 375 376)

に分割しなければならないのは、個々人が……彼の時間を正しく分割しなければならないと同様である。したがって、時間の経済は……共同社会的生産の基礎の上であいかかわらず第一の経済法則であり続ける」(MEGA II/1, S. 104)。

この引用文は非常に含蓄のある文章であるが、これまでの議論をふまえれば、理解は容易であろう。「商品の「価値」は、他のすべての歴史的社會形態にも、別の形態においてではあるが、同様に実在するもの、すなわち労働が「社会的」労働力の支出として実在する限りでの労働の社会的性格を」、つまり社会的分業のもとでの抽象的人間的労働の社会的性格を、「ただ歴史的に発展した一形態で表現するだけ」なのである。ここで注目したいのは、価値を理解するには「価値そのものの実体」を研究し、理解しなければならないというマルクスの指摘である。この指摘のすぐあとにマルクスが例を挙げているように、「価値そのものの実体」、すなわち抽象的人間的労働について理解するためには、「互いに結合した労働力の共同有機体としての原始共同社会における共同的性格を、したがってまた彼らの労働、すなわちこれらの力の支出の「共同的」性格を研究することが最も適切である。というのも、そこでは抽象的人間的労働の社会的性格が「簡単明瞭」に現れるからである。じっさい、マルクスが引用文 および においてこのような取り組みをおこなっていることは明らかであろう。にもかかわらず、多くの論者はロートベルトゥスやリカードと同じように「価値そのものの実体を研究しなかったし、理解しなかったのである」。

これまでみてきたところから、抽象的人間的労働を「純粋に社会的なもの」とみなす関係主義的解釈のみならず、価値をたんなる労働の生理学的エネルギーの対象化として捉える実体主義的解釈もまた、誤りであることが明らかとなる。抽象的人間的労働が対象化され、労働生産物の純粋に社会的な属性となることができるのは、たんにその生産に生理学的エネルギーが支出されたからではない。社会的分業のもとでは、どんな有用労働も、それが社会にとって有限な総労働の一部分を費やして行われるという意味で、抽象的人間的労働としての社会的性格を持っており、私的労働をする場合には、この社会的性格が生産物の属性として対象化され、価値という「純粋に社会的なもの」になる。もちろん、抽象的人間的労働それじたいは依然として素材的なものであるが、まさにこの素材的なものが社会的分業のもとでは一定の社会的意義を獲得するからこそ、それは価値として対象化されうるのである。だからこそ、また、商品の価値量は、それぞれの商品の生産に直接に要した労働時間によってではなく、社会的に必要とされる労働時間、すなわち社会的必要労働時間によって規定されなければならない¹⁹⁾。

とはいえ、マルクスはたんに価値の実体主義的解釈を斥けただけではない。マルクスが強調

19) 「商品世界の諸価値に表される社会の総労働力は、たしかに無数の個人的労働力から成り立っているけれども、ここでは一つと同じ人間の労働力として通用する。これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産に平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間の労働力である」(MEGA II/6, S. 73)。「抽象的人間的労働は人間の労働力の支出であるが、個々の人間の労働力はここ [引用者注：商品生産] ではただ社会的労働力の部分としてのみ通用し、したがってその支出の尺度は個別的な労働力ではなく、それらが社会的労働力の構成部分として機能する関係に見いだされるのである」(MEGA II/6, S. 31)。

しているように、どんな社会形態をとろうとも、社会的分業を営む限り、「社会の可処分労働時間がなんらかの仕方生産を規制する」ことは不可避である。というのも、社会的総労働は、労働が生理学的な意味での人間的労働力の支出を伴うものであるかぎり、有限であるほかなく、これを適切に配分することなしに社会を再生産していくことは不可能だからである。このような素材的な制約への注目はけっして古典派経済学の「残滓」²⁰⁾ではない。むしろマルクスは、古典派における労働犠牲説にもとづく主観的な価値論を、労働を人間と自然とのあいだの素材変換 *Stoffwechsel* を媒介する行為として把握することをつうじて、唯物論的に批判したのである²¹⁾。

マルクスの経済学批判は、たんに素材と経済的形態規定を混同してしまう物神崇拜の批判にとどまるものではない。むしろ、マルクスは形態規定を素材から徹底的に抽出し、分離した上で、この形態規定がいかに素材と絡み合うのかを分析しようとした。つまり、マルクスの眼目は、たんに形態規定の特殊歴史性を強調することにあつたのではなく、歴史貫通的に貫徹されなければならない、素材変換の制約から生まれる基本法則が、この特殊歴史的な形態規定によっていかに歪曲させられ、攪乱されるのかを明らかにすることにあつた。7で詳論するように、抽象的人間的労働は、まさに物象的形態規定による素材変換の編成を把握するための最も基礎的かつ重要な媒介となる。多くの先行研究は、このような形態と素材の絡み合いの重要性を見落とし、形態規定の歴史的特殊性に一面的に固執したからこそ、抽象的人間的労働という概念についても、その意義を見誤ることになったのである。 (下に続く)

20) Michael Heinrich, *Kritik der politischen Ökonomie*, Schmetterling Verlag, 2005, S. 48.

21) 「つまり犠牲ではなく、生産条件としての労働である。等価は、諸生産物の再生産のための条件、交換がそれらの生産物に与えたものとして表現している。すなわち、生産的活動を更新することの可能性を、この生産的活動自身の生産物によって措定されたものとして表現している」(MEGA II/1, S. 501)。